

(様式第4号)

上田市廃棄物処理審議会 生ごみリサイクル委員会 会議概要

1 審議会名	第2回上田市廃棄物処理審議会 第1回生ごみリサイクル研究委員会 合同会議
2 日 時	令和元年7月18日 午後1時30分から3時50分まで
3 会 場	清浄園 2階大会議室
4 出 席 者	中村彰会長、金子幸恵副会長、井田宗広委員、太田芳枝委員、栗田たか子委員、桑原茂実委員、小林裕美委員、小柳繁弘委員、齊藤ゆり子委員、佐藤昭秀委員、城田浩靖委員、関川久子委員、三浦胡桃委員、市川久由委員、太田緑委員、木村芳裕委員、杉山秀弥委員、藤森たか江委員、藤原俊六郎委員、宮原尚委員、村田英明委員、吉池卓司委員
5 市側出席者	山口生活環境部長、峰村資源循環型施設建設推進参事、佐藤資源循環型施設建設関連事業課長、橋詰資源循環型施設建設関連事業係長、土屋廃棄物対策課長、若林廃棄物指導係長、杉山真田市民サービス課長、佐藤武石市民サービス課長、北島ごみ減量企画室長、鈴木ごみ減量企画係長、尾崎ごみ減量企画係主事、笹井農政課農業振興係主事
6 公開・非公開	<input checked="" type="checkbox"/> 公 開 ・ <input type="checkbox"/> 一部公開 ・ <input type="checkbox"/> 非公開
7 傍 聴 者	0人 記者 5人
8 会議概要作成年月日	令和元年 7月25日

協 議 事 項 等

- 1 開会 (山口生活環境部長)
- 2 委嘱書の交付  
土屋市長から委嘱書を委員へ交付
- 3 上田市廃棄物処理審議会会長あいさつ (中村彰会長)
- 4 市長あいさつ
- 5 委員自己紹介
- 6 事務局自己紹介
- 7 生ごみリサイクル研究会委員長・副委員長選出  
・ 委員長に関川久子委員、副会長に吉池卓司委員を選出
- 8 審議会から委員への要請  
・ 生ごみリサイクルシステムの計画(案)の策定について
- 9 生ごみリサイクル研究委員会委員長あいさつ (関川久子委員長)
- 10 議事
  - (1) 第1回廃棄物処理審議会協議内容の確認  
・ 資料に沿い、北島ごみ減量企画室長から第1回廃棄物処理審議会の協議内容について説明  
・ 質疑等なし
  - (2) 審議会の役割  
・ 資料に沿い、鈴木ごみ減量企画係長より説明  
・ 以下、質疑応答  
(委 員) 生ごみリサイクル研究委員会設置要領には「生ごみを資源として活用するリサイクルシステムの構築」とあるが、これはスキームを考えるという考え方で良いか。  
(事務局) 収集頻度などの具体的なものまで議論していただきたいと考えている。

(委員) 生ごみリサイクル研究委員会設置要領第2条で、「生ごみのリサイクルを通じたまちづくりについて調査・研究を行う」とあるが、この表現では第1条で示す基本的な目的が薄れてしまうと感じる。また本委員会が、調査・研究を行うだけのものではなく、上田市にとってより良いまちづくりを目指すものであるという強い思いがある事を表現していただきたい。

(事務局) 第1条では循環型社会としての在り方を示した。これをより具体的に委員の役割として、「生ごみのリサイクルを通じて単に減量するだけでなく、生ごみが地域の中で有効に活用されていく社会の形成を目指すこと」を第2条で示していることから、第1条を矮小化させる意図は無いことをご理解いただきたい。

### (3) 上田市ごみ減量・再資源化施作の取り組みと成果について

- ・資料に沿い、北島ごみ減量企画室長より説明
- ・以下、質疑応答

(委員) 様々な御尽力によりごみの全体量は減少しているのと同時に上田市の人口も減少しているが、平成25年以降のごみ処理費用が増大しているのはなぜか。

(事務局) 上田、丸子の各クリーンセンターの老朽化が進み、維持管理のための大規模修繕にかかる費用が処理単価を上げている要因となっている。今後はごみの量を減らすことでごみ処理費用を抑え、その分を他のまちづくり施策に活用したいと考えている。

(委員) 平成19年の塩田地区での生ごみ堆肥化モデル事業において、悪臭の発生など施設構造や運営に課題があったことや、分別収集に対する自治会理解・協力が進まなかったとあるが、具体的にはどのような面で課題があったのか。

(事務局) 簡易的な構造であったことから、近隣住民の皆様から環境面での苦情を受けることとなった。また、市による収集、民間による管理運営という体制が一体的に機能していなかった事も課題であったと考えている。家庭から排出される生ごみに関しても、水切りや正しい分別など基本的な部分からより多くを啓発していくべきであったとも考えている。

(委員) 堆肥を生産する過程で、水分・温度調節、生ごみと副資材の種類や比率など技術的な面ではどのように課題があったのか。

(事務局) 当時は生ごみのみによって堆肥を作ったという記録があった。また、当時の事業に携わった方の話を聞くと、水分調整剤としてキノコ廃培地を混ぜたという話もあった。

(委員) 生ごみだけでは堆肥の生産はできないので、そこに問題があったと考えられる。

(委員) 以前この堆肥化事業に協力させていただいたことがあるが、当時は堆肥化に関する情報が少なく、行政との連携も不十分であった。施設サイドも信州大学の協力を仰いだり、もみ殻・くん炭を投入するなどの試行錯誤を重ねたが、水分調整の面でうまくいかなかった。

### (4) 市民アンケート結果（確定）

- ・資料に沿い、尾崎ごみ減量企画室主事より説明
- ・以下、質疑応答

(委員) 燃やせるごみを月に8回（週に2回）出しているのが全体の約4割にとどまるという結果から、地域の方がかなり減量に努力されていると感じる。都市部では多くが週2回の回答となると推測される。この結果は上田市だけでなく、長野県全体がこうした

傾向にあるのか。

(事務局) 環境省のごみ処理実態調査によると、人口 10 万人以上 50 万人未満都市における 1 人 1 日あたりのごみの排出量を比較すると、上田市は 236 都市中 21 位と上位にある。また、長野県は県民一人一日あたりのごみの少なさにおいて、4 年連続でトップになるなど、ごみの減量への取組が進んでいると考えている。

(5) ごみの組成分析について

- ・資料に沿い、北島ごみ減量企画室長より説明
- ・質疑応答なし

(6) ごみ処理の概要

- ・資料に沿い、鈴木ごみ減量企画係長より説明
- ・以下、質疑応答

(委 員) 事業者から排出される生ごみを分別するのは難しいと考えられるが、年間約 400 t もの量が資源化処理できているのはなぜか。

(事務局) この数字は旅館や結婚式場、小売店、病院などの事業所から生ごみを収集し、豚の餌として処理している許可業者への聞き取り等により算出したものである。大手の事業所では、排出されるごみはストックヤードで品目ごとに分別されているが、行き先が無いために混合されてしまうという実態がある。一部の許可業者の中には、こうした生ごみを域外で飼料化したいという声もある。

(委 員) 事業所の生ごみは周辺市町村の堆肥化施設に入れているということはないのか。

(事務局) 各自治体が設置している施設であり、上田市のごみがそちらに搬入されていることはない。

(委 員) 事業所の生ごみを豚の餌としているとあったが、これは無料で引き取りをしているのか、また収集する生ごみに含まれる塩分量の違いが与える影響はないのか。

(事務局) 各収集業者によって料金は異なるので一概には言えないが、こちらで把握している学校給食センター分はわずかな額で収集している。また、一般的に生ごみの塩分は生産される堆肥には大きな影響は与えないとされている。

(委 員) 水切りによって塩分は流れてしまう。また、様々な分析をしたが、生ごみに含まれる塩分はそれほど堆肥に影響を与えない。

(7) 生ごみリサイクルシステムの考え方について

- ・資料に沿い、北島ごみ減量企画室長より説明
- ・以下、質疑応答

(委 員) 生ごみリサイクルシステムの構築に関して、基本姿勢は「まちの活性化」よりも、「上田市の特性を活かした独自のシステムを構築する」ことを強調した表現の方が良いのではないか。

(事務局) 内容を検討させていただきたい。

(8) 今後の審議予定等について

- ・資料に沿い、鈴木ごみ減量企画係長より説明
- ・以下、質疑応答

(委 員) 視察先は今後の上田市にとって参考となる施設にすべきだ考える。各施設で生産される堆肥の比較やコスト面、方式など委員の中で検討して視察先を選ぶべきではないか。

(事務局) 周辺市町村の各資源化施設の特性や設置の背景などを勘案した中で提案させていただきたい。

(委員) 資源循環型社会を考えるのであれば、浅麓汚泥再生処理センターのようなバイオガス化の施設は視察すべきではないか。

(事務局) 浅麓汚泥再生処理センターは全体で約 65 億円の規模である。また、上田市では現状、下水・し尿・ごみ処理施設が一定の地域に集中しており、下水処理施設に併せてバイオガス施設を設置することは地元住民の方々にとって抵抗感があり、市としても避けたいと考えている。こうした事業に係る費用や建設候補地などを考えると、今すぐ取り組める方法としては既存施設を利用して資源化することが考えられる。一方で、バイオガス化は堆肥化に比べ、分別にかかる負担は軽減されるといったメリットも多々あるため、将来的な設計の中では検討すべき事項であると考えている。

(委員) 焼却炉の建設コストの目安として、1 t / 日の処理能力につき約 1 億円と言われている。これと比較すると、東御市や浅麓汚泥再生処理センターの建設コストは高額である。上田市で将来的に資源化施設を検討するのであれば、1 日の処理能力が 10 t 以上の施設規模を想定すべきであり、コスト面でもこれに合わせて考えるべきである。

(委員) まだコスト計算の段階ではなく、事務局から提案された従来型のパドル式等の施設を視察した上で検討し、コストの議論につなげるべきだと考える。

(会長) 処理方式の面とコスト面の双方の視点から、事務局の提案のあった施設を視察するという事としたい。

#### (9) その他

(委員) 上田市はごみの指定袋有料化の際に各種袋の容量を設定したが、合併を機に「大」「中」「小」の 3 種類に変更され容量としてはかなり大きくなった。ごみ袋が大きければそれだけごみを入れてしまう心理が働くのでこのままではごみの減量につながらない。生ごみの減量・再資源化を検討するこの機会に、サイズや価格の変更なども併せて審議させていただきたいと思います。

(委員) 「生ごみ出しません袋」は小サイズであるが、生ごみを入れなければ 1 週間は出さずに済む。サイズを小さくすることでごみの減量につなげるというのは良い案だと思う。

(会長) 廃棄物処理審議会の中で別途議論する内容としたい。

#### 11 閉会 (山口生活環境部長)